

富士山

御殿場口の自然環境と課題

2026年版



《目次》

はじめに	1
宝永噴火と森林限界	2
御殿場口周辺の地質・地層	3
御殿場口周辺の火山噴出物の分布	4
御殿場口火山荒原の半世紀	5
火山荒原の自然環境	6
気温・地表温度・地中温度	7
雪代堆積地の土壤水分量	8
雪代の被害と森林限界	9
砂沢と雪代	10
イタドリから森への遷移	11
火山荒原に生育する植物	12
自然攪乱がもたらす生物多様性	13
火山荒原の野鳥	14
火山荒原の植生自然度	15
火山荒原へのカラマツの植樹・玉穂村～玉穂財産区	16
植樹活動の推移	17～19
① 国有林のカラマツと植樹	
② 雪代による地形の変化と森林の形成	
③ 砂礫地帯の緑化活動	
④ 大規模雪代による植生の消失	
⑤ 自然景観と植樹活動	
植生の変化と植樹活動による侵入植物	20
富士山自然誌研究会による調査	21
植物相調査とコドラートによる植生調査	22
御殿場口火山荒原①の植物相調査記録(2019年まで)	23～24
御殿場口火山荒原①で記録された植物の帰化率・侵入種率	25
駐車場と周辺部②と演習場空地と旧ブルドーサ道③の侵入植物	26
御殿場口火山荒原①のコドラートによる植生調査	27～31
森林限界および非植栽区域の植生調査	32
コドラート調査と植樹活動	33
注意を要する侵入植物	34
ハンドブック「御殿場口雪代堆積地の侵入植物」	35
侵入植物の駆除活動	36
新聞記事「富士山御殿場口増える侵入植物」ヒメスイバの駆除	37
あとがき	38

はじめに

西暦1707年の宝永噴火は富士山の噴火の中でも最大級といわれ、麓の村や田畑も砂礫に覆われ、南東側の中腹では広範囲の森が焼失、埋没し、火山砂礫(スコリア)は斜面に厚く堆積しました。御殿場口新五合目周辺は、繰り返し発生する雪代(スラッシュ雪崩)と強い風のため地面が安定せず、300年以上経過した現在も森林の再生は進まず、森林限界は他の登山道より1000mも低い標高1,400mあたりに停滞(P2参照)しています。その火山荒原には先駆植物(パイオニア植物)のフジアザミ、イタドリ、フジハタザオなどが生育し、標高2,000m以上の高所から雪代で流されてきたオンタデも見られます。(表紙写真)

静岡県は富士山の自然植生を守るため外来植物の調査、駆除活動に取り組み、登山道、遊歩道の入口には泥落としマットが設置され、外部から植物の種子が持ち込まれるのを防ぐ対策がとられています。

一方、御殿場口周辺では長期にわたり植樹活動が続けられており植物の種子が苗とともに持ち込まれた結果、外来植物を含む侵入植物が大量に確認されています。

また、先駆植物の生育地である裸地部分に植樹が行われたためフジアザミは激減してしまいました。

2014年12月、静岡県は御殿場口で植樹活動、環境調査などを行っている市民団体、地権者などに呼びかけ、外来植物等に関する意見交換会を実施しました。その結果、御殿場口の外来植物、侵入植物の増加が深刻であり、何らかの対策が必要な状態であることが確認されました。

当会はこの課題に早急に取り組む必要があると考え、御殿場市環境課との協働事業として、2015年から2017年の3年間、御殿場口での植物調査、自然環境調査、侵入植物駆除のためのハンドブック作成、侵入植物の駆除活動などに取り組み、2018年2月に、冊子「富士山御殿場口の自然環境と課題」を発行しました。その後、モニタリング調査記録を加えた改訂版を2020年に発行しました。現在は御殿場市富士山環境保全・教育推進事業として御殿場口での活動を継続しています。本書は、新たに判明した史実、モニタリング調査記録などを加えて作成した2026年版です。



植栽されたミズナラ(非自生種)の根元から外来種のハキダメギク、オッチカタバミ、オランダミミナグサ、タチイヌノフグリと、非自生種のイヌタデ、キランソウ、タネツケバナ、カヤツリグサの仲間などが発芽している。(2019年8月)

宝永噴火と森林限界

西暦1707年の宝永噴火により火口周辺の森林は焼失し、南東斜面は大量のスコリア(※)に埋没しました。それから300年余りの時を経て、火口の西側では標高2,400mまで森は再生しましたが東側は現在も火山荒原が広がり、森林限界は標高1,400mあたりに停滞しています。

※ ここでは主に黒い玄武岩砂礫



2001年に撮影された航空写真の色彩を強調したもの・草原は黄色、人工林などは濃い緑 航空写真提供・株式会社エアロ・フォト・センター



① 宝永火口西側 標高2,400m付近



② 須走口 標高2,000m付近



③ 双子山森林限界 標高1,650m



④ 御殿場口 標高1,400m付近

御殿場口周辺の地質・地層

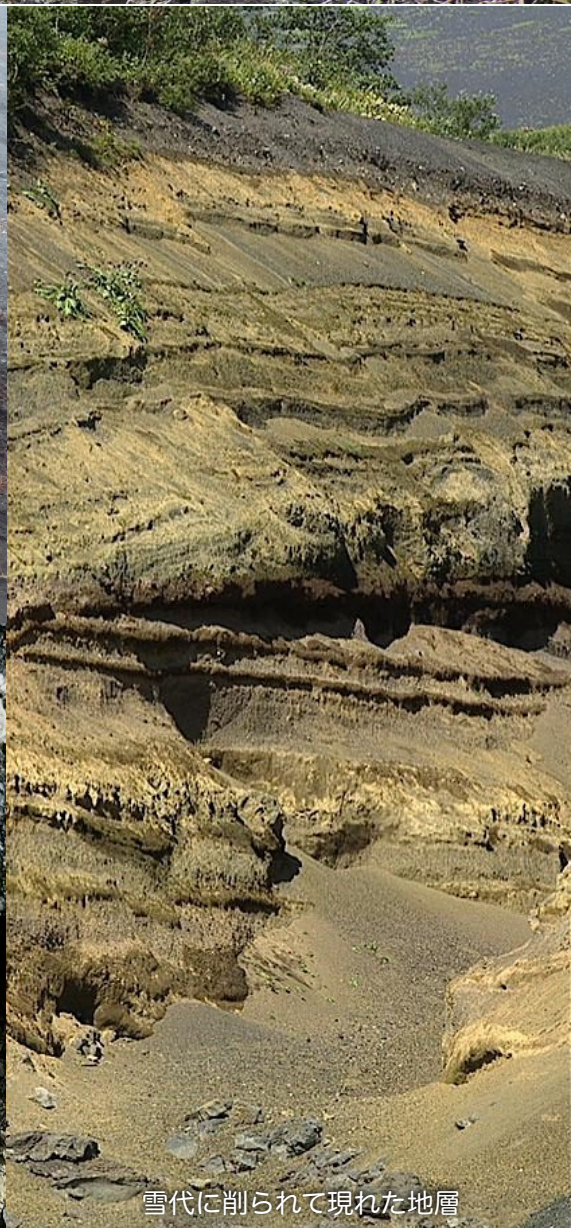
スコリアが厚く堆積し、なだらかな地形の御殿場口周辺ですが、一部に溶岩もみられることからスコリア層の下には溶岩流があることがわかります。また、雪代(スラッシュ雪崩)に削られた地層からは宝永噴火に埋もれた森林の様子や過去の火山活動を知ることができます。



スコリア層に深く根を張るイタドリ



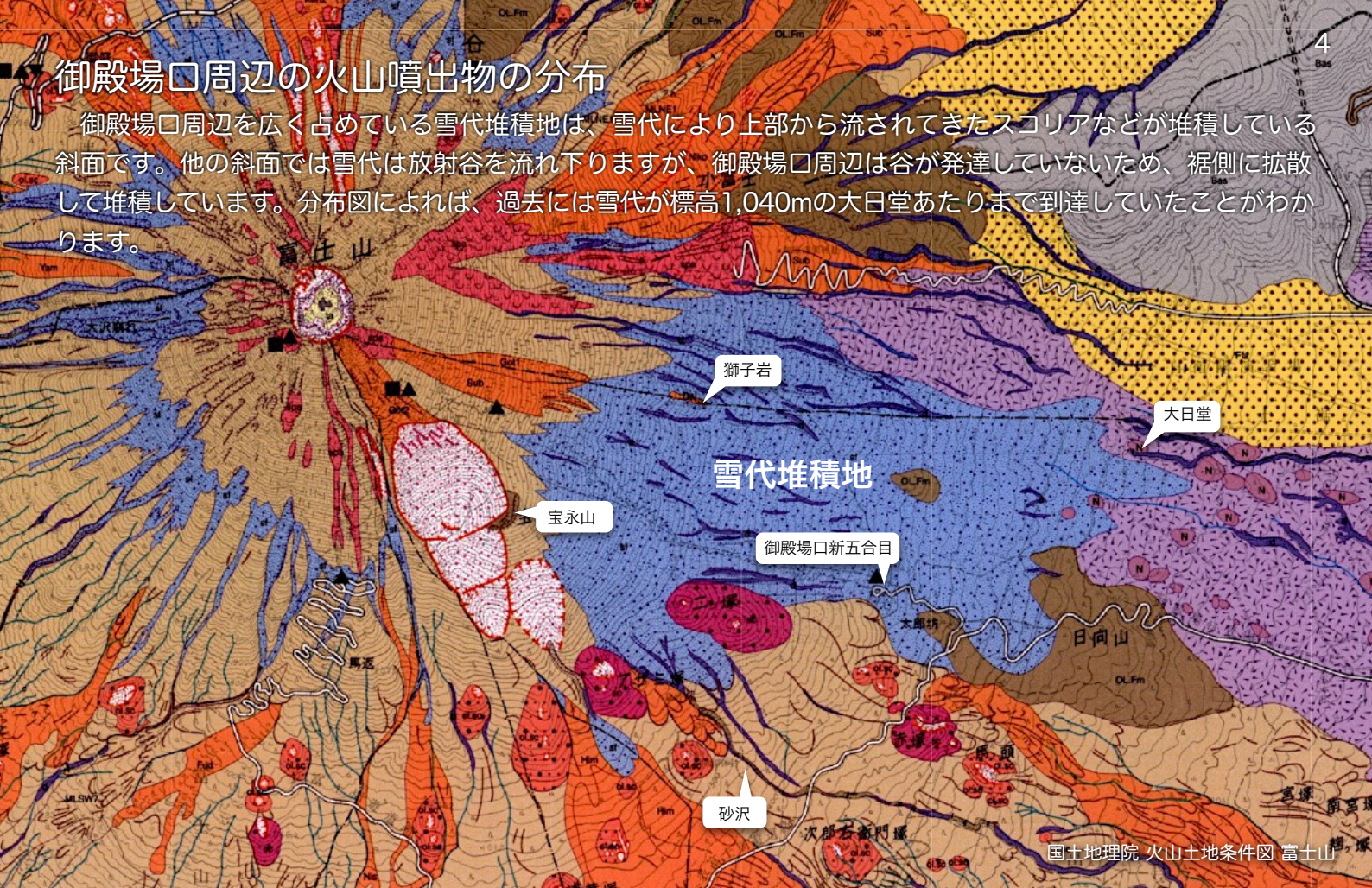
宝永噴火により埋もれて炭化した樹木



雪代に削られて現れた地層

御殿場口周辺の火山噴出物の分布

御殿場口周辺を広く占めている雪代堆積地は、雪代により上部から流されてきたスコリアなどが堆積している斜面です。他の斜面では雪代は放射谷を流れ下りますが、御殿場口周辺は谷が発達していないため、裾側に拡散して堆積しています。分布図によれば、過去には雪代が標高1,040mの大日堂あたりまで到達していたことがわかります。



雪代

2007年2月の雪代は標高2,500m付近で発生し、先端部は森林限界近くまで到達しました。小規模な雪代ですが、このような雪代が繰り返されることでスコリアが少しずつ下流に移動し、堆積していることがわかります。尾根状の地形の獅子岩(写真右)は雪代が到達しないため植生が発達しています。



御殿場口火山荒原の半世紀

写真は1969年の幕岩遊歩道入口付近の火山荒原です。左の丘には1975年にスキーリフトの乗り場が建設され、1990年の雪代で大被害を受けるまでスキー場が営業されていました。この半世紀の間に大規模な雪代が5回発生し、その度に植生が失われました。約50年後、フジアザミが見られなくなった以外には植生に大きな変化はありません。雪代が到達しなかった丘陵部分にはカラマツの林が形成されました。



火山荒原の自然環境

スコリアが堆積した南東斜面は、強風のため砂礫が移動し、日照の輻射熱により地表は高温になり乾燥します。こうした環境に適応した先駆植物(パイオニア植物)だけがここに進出することができます。また、雪代による大規模な自然撈乱(自然現象による破壊)が頻繁に起きるため植物は消滅と再生を繰り返しています。



先駆植物のフジアザミ

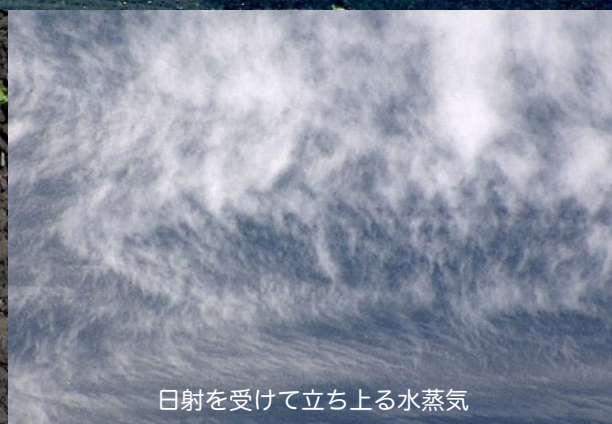
消滅と再生を繰り返しながら草原からカラマツの森へと少しずつ遷移する御殿場口付近の火山荒原



砂礫を巻き上げて吹き荒れる突風



輻射熱による高温



日射を受けて立ち上る水蒸気



雪代による森林の消失 1995年

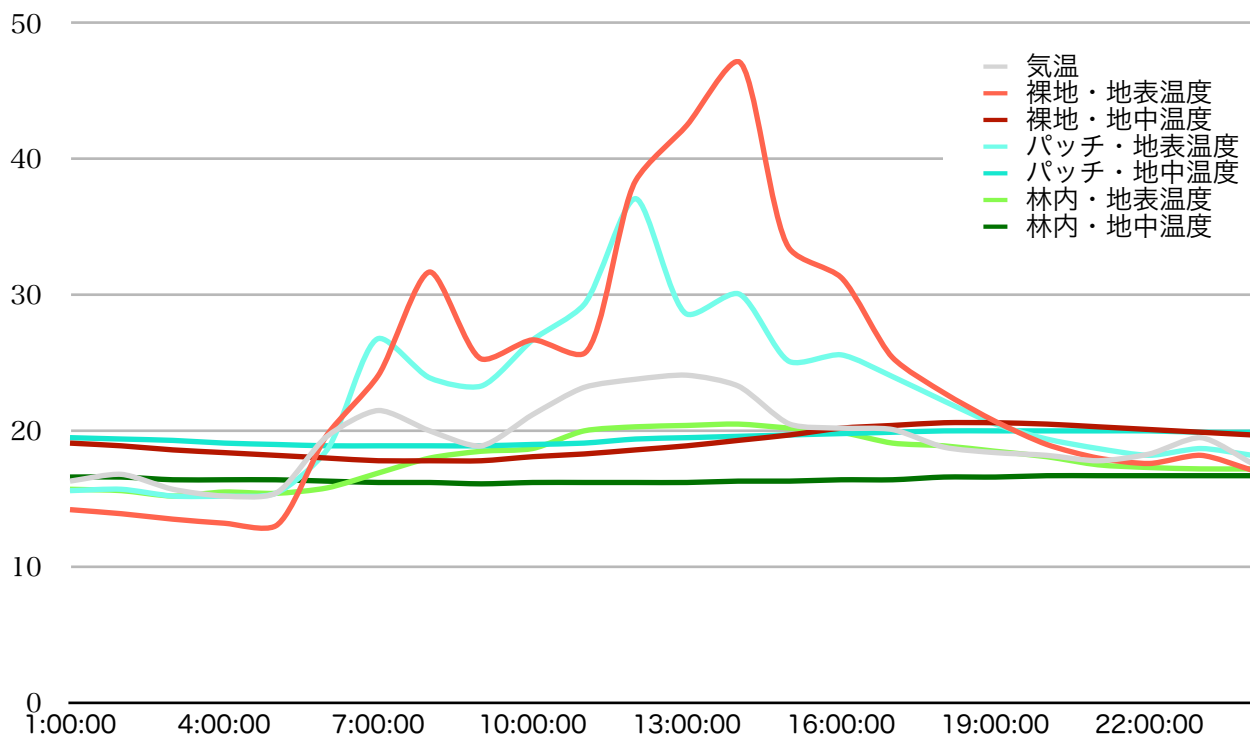


残ったウラジロモミ

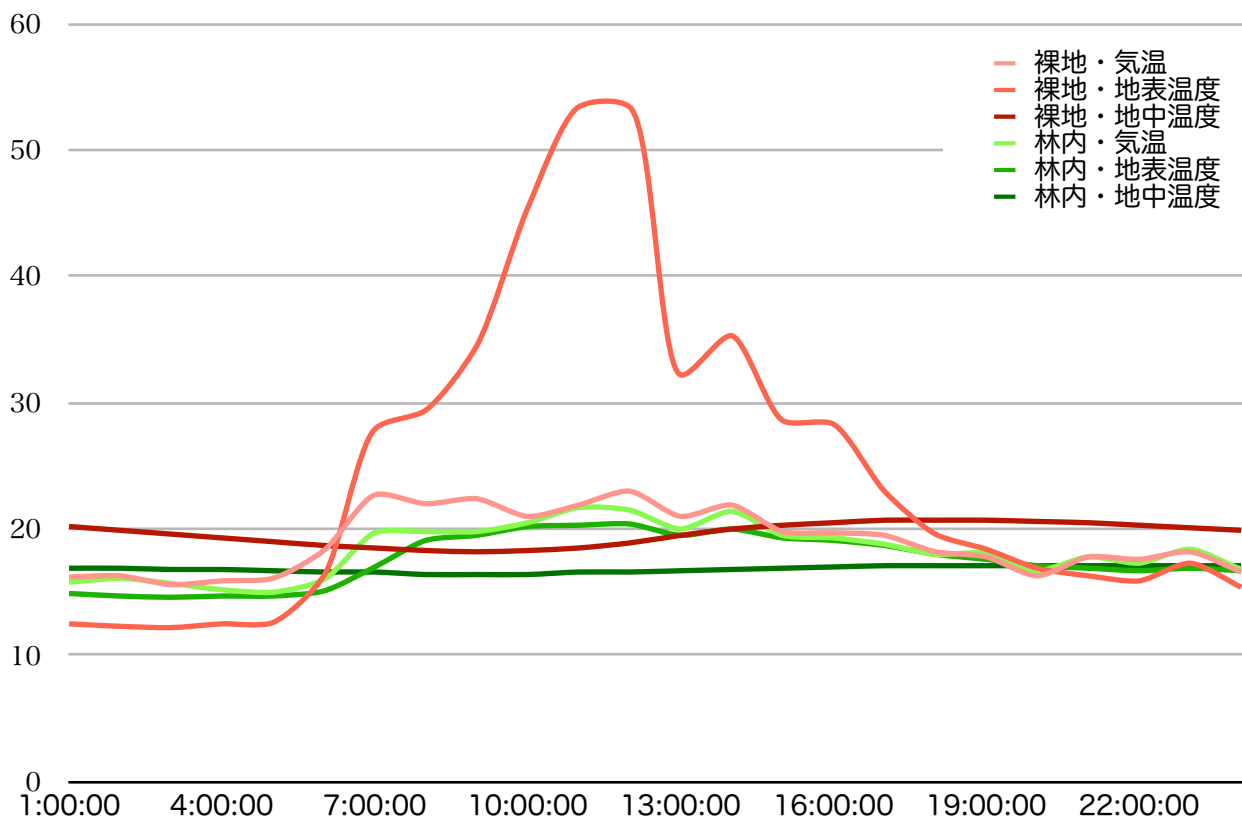
☀️ 気温・地表温度・地中温度

富士山御殿場口はランドサットの衛星観測データにおいて、地表温度が非常に高くなる場所の一つとして知られています。御殿場口周辺の6箇所でセンサーロガーによる空中、地表、地中の温度を計測した結果、火山荒原の裸地部分では地表温度が50度を超えることもあり、植物には非常に厳しい環境であることがわかります。

【雪代堆積地 2017年7月11日】



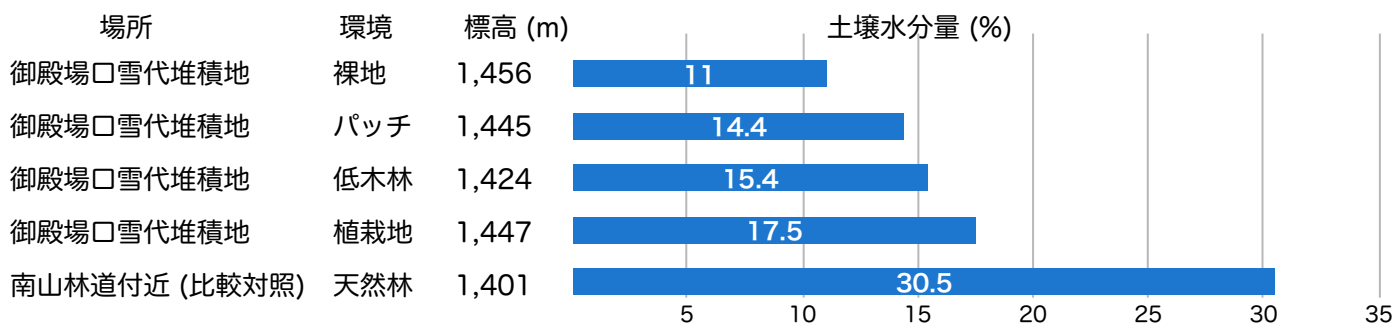
【双子山森林限界 2017年7月11日】



雪代堆積地の土壌水分量

雨天翌日の調査記録です。植物の繁殖にともない土壌水分量が増加しており、植物が水分の蒸発を抑制していることがわかります。植栽地の水分量が多い原因は苗とともに持ち込まれた土によることなどが考えられます。火山荒原の裸地部分の水分量は森林の36%という結果になりました。

調査 2017年8月9日 天候・晴れ (前日の天候は雨)



裸地部分



パッチ



低木林



植栽地



天然林



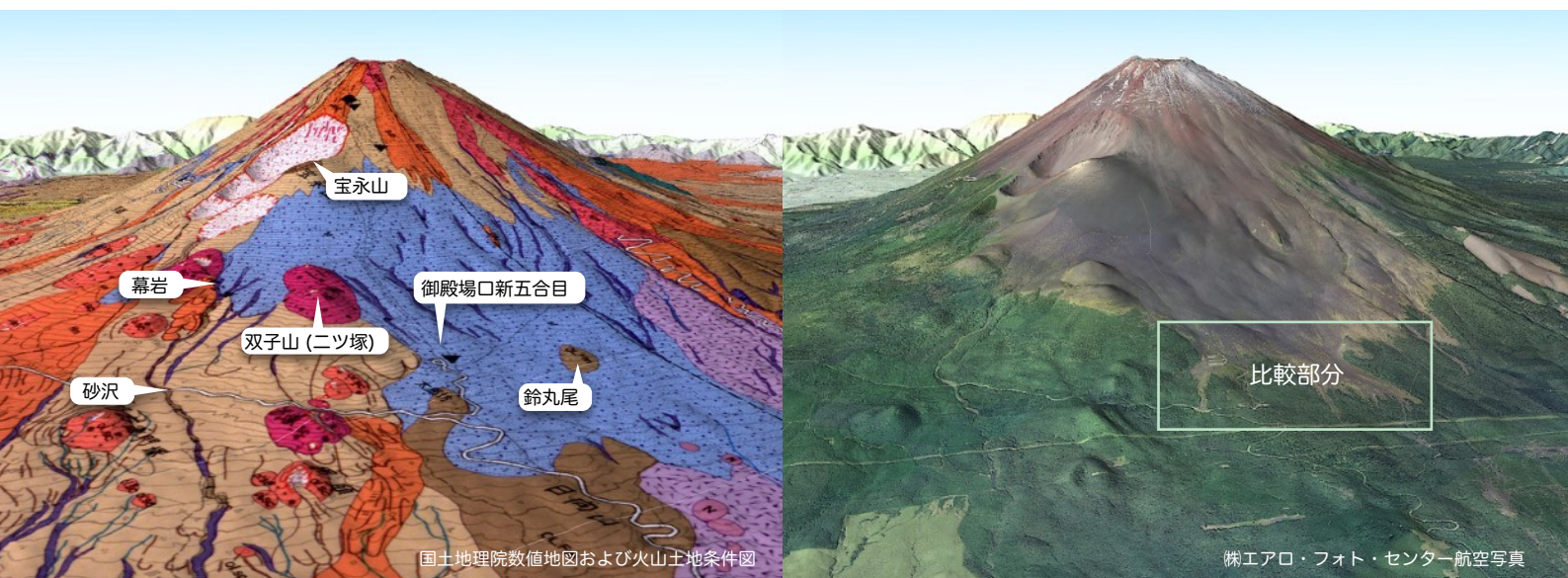
地表より15cmの土を採取

雪代の被害と森林限界

雪代とは、気温上昇と低気圧による大量の降雨により、積雪層が凍結した地盤とともに土石流となって流れ下る現象です。1834年5月、山頂近くで発生した雪代が放射谷を流れ下り、北麓の富士吉田市、西麓の富士宮市に到達して大きな災害をもたらしました。

近年の南東斜面の大規模な雪代は、1956年5月5日、1972年3月20日（暴風雨により登山者が低体温症と雪代に巻き込まれるなどで24名が遭難死）、1995年3月17日（広範囲の森林が破壊され、駐車場施設、TV中継所、富士山スカイラインに大きな被害）に発生しました。この他にも中規模の雪代による市営スキー場の施設の破壊、御殿場口駐車場が埋没するなどの被害がありました。

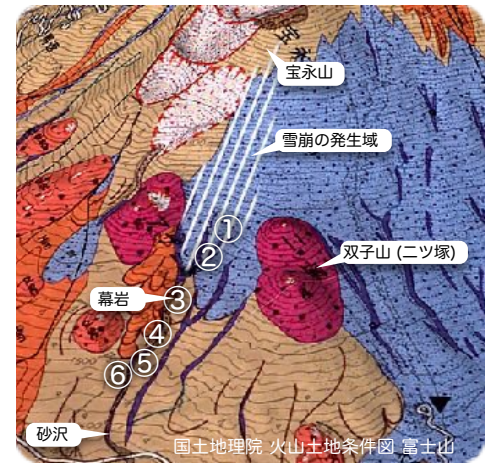
近年の大規模雪代の中で1995年の雪代は1972年の雪代よりも規模が大きかったため広範囲で森林限界が後退しました。高い地形の鈴丸尾は雪代が到達しないため森林限界が上昇しています。



砂沢と雪代

南東斜面で唯一の沢である砂沢はその名のように、雪代が土砂を巻き込んで沢に集中して流れ下ります。上流の幕岩近くでは沢から溢れた土砂による爪痕を沢沿いの森に見ることができます。

砂沢の上流は宝永山のため雪崩の発生位置が低く、範囲も狭いため、下流に及ぶような災害は発生しにくいと考えられます。1927年に発生した雪代が沢を流れ下って標高400mまで達したことがあります。被害が発生したという記録はありません。現在は沢の中流域に砂防堤が設けられています。



① 宝永山と雪代跡 標高1,750m・2007年



② 砂沢上流の堆積物 標高1,700m・2007年



③ 雪代で看板が埋った幕岩下 標高1,640m・2010年



④ 沢に堆積したスコリア 標高1,550m付近・2010年



⑤ 沢から飛ばされた石 1971年



⑥ 上流側に傷跡が残る沢沿いの森 標高1,470m

イタドリから森への遷移

御殿場口から幕岩への遊歩道ではスコリア荒原から若い森へ、さらにブナが生育する森へと森が遷移してゆく様子といろいろな植物を観察することができます。

- ① イタドリは石や溶岩などを足がかりに少しずつ面積を広げてゆきます。
- ② そこにさまざまな植物が定着してパッチ (植物群落) が形成され、強風に飛ばされた砂礫がパッチに取り込まれ、長い時間をかけて群落は島のような形状になります。
- ③～④ カラマツ、ミヤマヤナギなどの樹木が定着し、カラマツを中心にダケカンバ、ナナカマド、ヤマハンノキなどの陽樹が成長するとパッチを形成していた植物は消えてしまいます。
- ⑤～⑥ 陽樹林が形成されて地面に入る光が少なくなるとブナなどの陰樹が成育を始めます。



① 安定した石とイタドリ



② 島状のパッチ



③ 樹木が定着したパッチ



④ 森林限界のカラマツ林



⑤ 陽樹中心の混交林



⑥ ブナが生育する森

厳しい環境のスコリア荒原に最初に進出する代表的な植物はイタドリ、フジアザミ、フジハタザオなどの先駆植物(パイオニア植物)です。高所から雪代で流されてきたオンタデは根から発芽しています。イタドリが成長し地面が安定するとパッチを中心にさまざまな植物が定着し、カラマツなどの樹木が成長を始めます。



イタドリ



フジアザミ



フジハタザオ



オンタデ



キオン



カリヤスモドキ



ヒメノカリヤス



クサボタン



ムラサキモンヅル



タチコゴメグサ



ヤマホタルブクロ



ハナイカリ



カワラナデシコ



アキノキリンソウ



ノコンギク



ネバリノギラン



コタヌキラン



ヤマハコ



フジオトギリ



カラマツ



ミヤマヤナギ



イヌエンジュ



シモツケ



フジバラ

自然撓乱がもたらす生物多様性

富士山では噴火や雪代で森が失われた新しい空間にさまざまな植物が生育を始め、長い時間をかけて植物が入れ替わり遷移することで生態系に多様性が生まれます。数十年という短い間隔で撓乱(大規模雪代)が繰り返される御殿場口の火山荒原では森林は成立することができず、先駆植物を中心とした独自の生物群集が形成されており、希少な昆虫が生息し、野鳥や動物たちが生きています。自然撓乱は人間からみると自然が失われた災害ととらえられがちですが、生物の多様性を創出するためには重要なことなのです。



カラマツ シモツケ イヌエンジュ フジイバラ イタドリなどの植物群落



キツネ



ヤマドリ



カリヤスモトキ草原



ヒメシジミ



エノアカヤマアリ

火山荒原の野鳥

御殿場口から須走口にかけての火山荒原にはイワヒバリ、ビンズイ、ホオジロ、カヤクグリなどの野鳥が生息、繁殖します。2017年にはNHKの番組でヒバリの営巣が紹介されました。



カヤクグリ



イワヒバリ



ビンズイ



ホオジロ

幕岩遊歩道～双子山 標高1,480m～1,680m 2017年8月2日 天候・霧または雨

森林限界以上	シジュウカラ	ビンズイ	ホトトギス	ウグイス	ホオジロ
森林内	シジュウカラ	ビンズイ	モズ	カッコウ	キジバト
	コガラ	ヒガラ	ミソサザイ	アカハラ	ヤマガラ
	ルリビタキ				

巣材に使われるゴミなど

火山荒原の営巣調査で、植樹が行なわれて自然植生が変わってしまった場所では野鳥の営巣が減少することが確認されています。また、火山荒原の野鳥の巣にはたくさんのゴミが使われていました。スズランテープなどを使って作られた巣は壊れやすいことがわかっています。親鳥にゴミが絡んだり雛がゴミを食べて死んだこともあります。ゴミを出さないことはもちろんですが、マーキングなどにこのようなテープを使うのも止めるべきでしょう。



ゴミが混じった火山荒原の巣

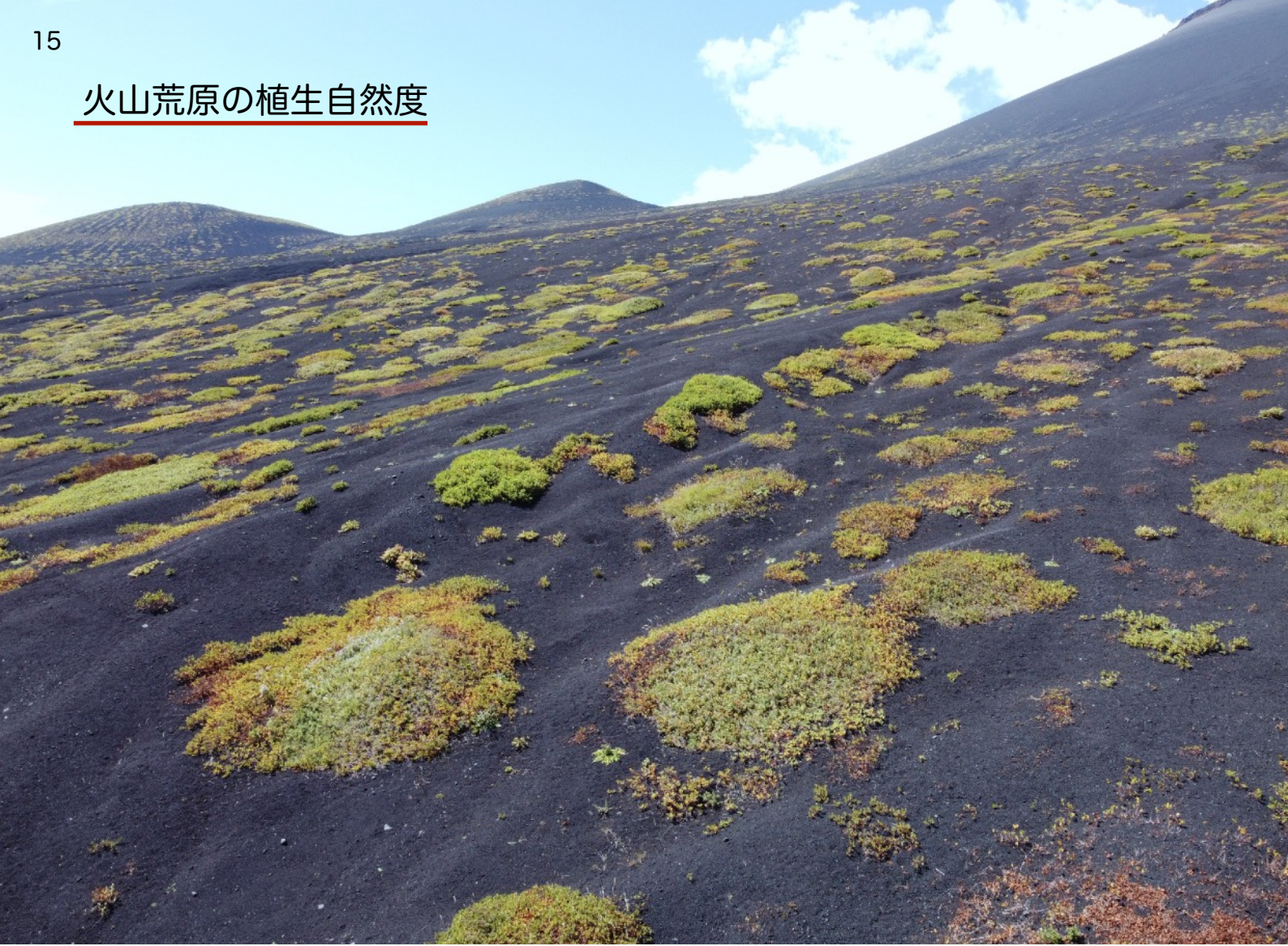


須走口付近の野鳥の巣



マーキングに使わないようにしたい

火山荒原の植生自然度



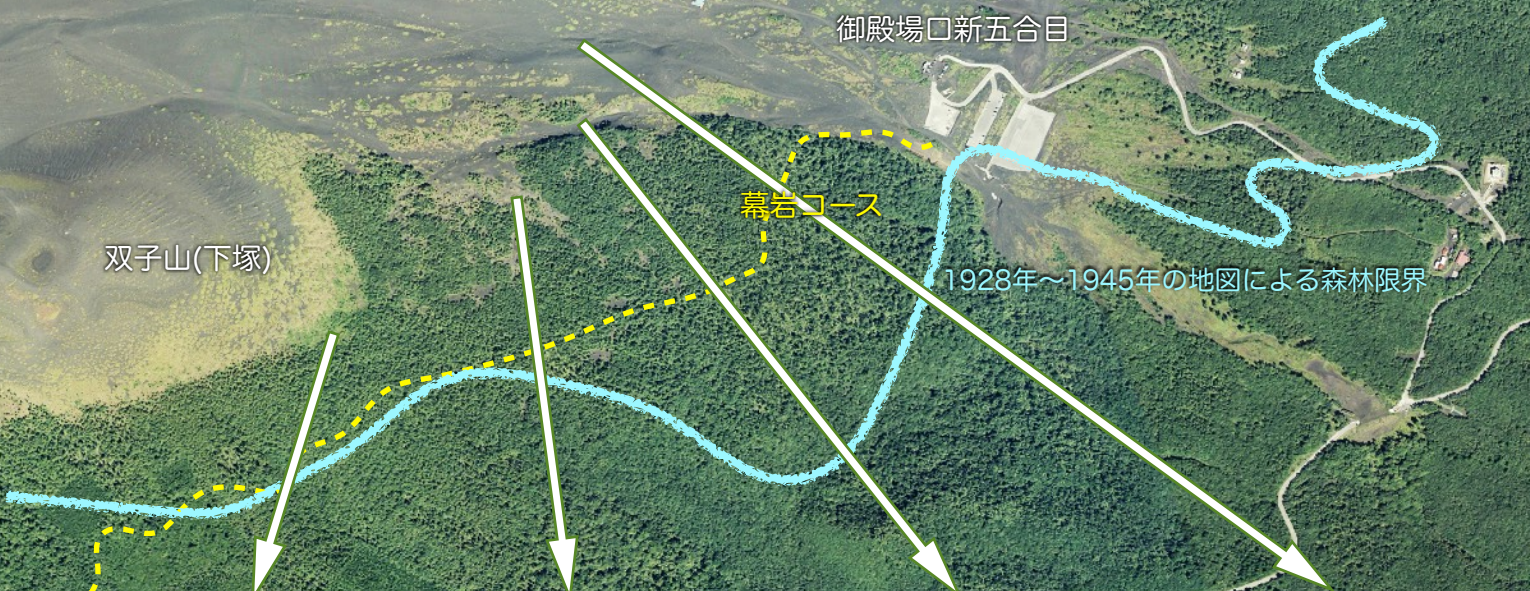
御殿場口周辺の火山荒原は、環境省の「植生自然度」が最もランクの高い「10」にあたります。侵入種による植生攪乱の観点からはその影響の程度が最も甚大となるため、侵入種の定着状況を継続的に調査し、定着種の抜き取りなど、拡大防止のための施策が必要です。

「植生自然度」植物社会学的な観点から群落の自然性がどの程度残されているかを示す一つの指標(環境省)

植生自然度と区分基準	
10	高山ハイデ、風衝草原、自然草原等、自然植生のうち単層の植物社会を形成する地区
9	エゾマツ・トドマツ群集、ブナ群集等、自然植生のうち多層の植物社会を形成する地区
8	ブナ・ミズナラ再生林、シイ・カシ萌芽林等、代償植生であっても、特に自然植生に近い地区
7	クリーミズナラ群落、クヌギ・コナラ群落等、一般には二次林と呼ばれる代償植生地区
6	常緑針葉樹、落葉針葉樹、常緑広葉樹等の植林地
5	ササ群落、ススキ群落等の背丈の高い草原
4	シバ群落等の背丈の低い草原
3	果樹園、桑園、茶畑、苗圃等の樹園地
2	畑地、水田等の耕作地、緑の多い住宅地
1	市街地、造成地等の植生のほとんど存在しない地区

火山荒原へのカラマツの植樹・玉穂村～玉穂財産区

㈱エアロ・フォト・センター航空写真(2001年)



植樹カラマツが枯死(2001年)



ウラジロモミを補植(1970年頃)



残存しているカラマツ(2021年)



カラマツ16,000本植樹(1973年)

玉穂村の時代にカラマツの植樹が行なわれた斜面(写真②)の双子山側は30年程で森林限界が約1,000m(標高差 230m)上昇しています。下の写真の3年後の1972年に大規模雪代が発生し、草原も樹木も消失しました。翌1973年、双子山と登山道の上に16,000本のカラマツが植えられました(写真④)。しかし、その後の雪代で殆どが消失したため、以降、植樹は行われなくなりました。雪代が到達しなかった場所に植樹されたカラマツの一部(写真③)が残っています。双子山(二ツ塚)の森林限界に植栽されたカラマツの上部は少雨による乾燥で立ち枯れ(写真①)しました。数十年に一度の異常気象が森林限界の上昇を抑制しています。



御殿場口(1969年)

植樹活動の推移

① 国有林のカラマツと植樹

かつて富士山のカラマツは「富士山のトンカラ(天然カラマツ)」として高値で取引されていました。南斜面の標高1,900m付近の森には当時伐採された切り株が今も残っています。世界遺産の構成資産となっている標高1,500mの須山口沿いには100年以上前に植えられたカラマツの人工林が残されています。双子山の裾に広がっていた



カラマツの古い切り株



1910年に植栽されたカラマツ

火山荒原も同じ標高であることから玉穂村では国に倣って自生種のカラマツを植えたものと思われます。後年、苗が活着しなかった場所の補植などにウラジロモミやシラビソを植えたのも国に倣ってのことでしょう。

② 雪代による地形の変化と森林の形成

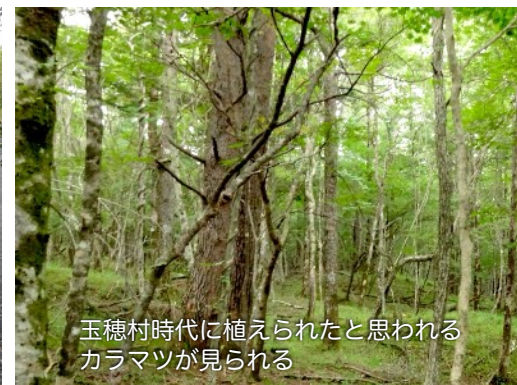
植樹が始められてから約100年経過する間に雪代によって双子山東側の沢が深くなり、雪代が到達しなくなった双子山の南東側には、さまざまな樹木が成長を始めて若い森が形成されました。



拡大する沢(1995年)



林縁部のヤマハンノキ



玉穂村時代に植えられたと思われるカラマツが見られる

③ 砂礫地帯の緑化活動

玉穂村のカラマツの植樹は造林事業でしたが、1970年代から始まった植栽活動は、市民が主体となって開始された緑化活動です。フジアザミなどの自生種の種子を採取して麓で苗を育て、火山荒原に植栽して緑を増やそうとするものでした。



フジアザミの種子採取と営林署員による挿し木の指導(1991年)

1990年代、緑化活動は組織化され、江戸時代に西麓と北麓で大災害が発生(※)したことから、植樹により雪代による崩壊を

防ぐことが必要であるとされました。この計画に対し、学識者などから「自然環境に手を加えるべきではない」「畑の雑草が持ち込まれる」「植樹しても雪代で消失する」など、多くの反対意見が出たため、組織から脱退する人が多く、計画は中断しました。その後、苗の土を落としてピートモスを使用するとした雑草対策がとられて計画は4年遅れて開始され、自治体の支援により、多くの市民、団体、企業などが参加する活動になりました。

※ 雪代が放射谷を麓にまで流れ下り大きな災害となったが、御殿場口では放射谷がないため雪代は拡散する。

④ 大規模雪代による植生の消失

1995年3月、大規模な雪代が発生し、標高1,400mの森林限界の森をなぎ倒して流れ下り、標高1,250mの富士山スカイラインまで到達しました。この雪代により火山荒原の植生は失われました。



大規模雪代が発生する数日前の御殿場口 写真の植栽樹は全て消失した 1995年3月撮影



大規模雪代後の御殿場口 1995年撮影

⑤ 自然景観と植樹活動

1995年の雪代により、植樹された樹木は全て失われましたが、植樹活動は継続されることになりました。しかし「自生種を植栽し、雑草を持ち込まない」とした初期の植樹の方針は変更され、自生種ではない樹種の植栽(写真中段)、苗ポットの土ごとの植栽、有機物の散布(写真下段)などを行なう団体もあらわれ、外来種を含む非自生種が激増する原因となりました。生育地を失ったフジアザミは激減し、土止め、風を遮る囲いなどが設置されて御殿場口周辺の自然景観は失われました。



土止めとミヤマヤナギが植栽された斜面にはカラマツが自生し成長している(2017年撮影)



土止め



竹囲い



防草シート?



植栽樹のプレート



イヌシデ



ツツジの仲間



ヤマボウシ



ミズナラ



イヌコリヤナギ



苗ポット



持ち込まれた土



根元に撒かれた肥料?

植生の変化と植樹活動による侵入植物



富士山自然誌研究会による調査

2010年に御殿場口で行なわれた富士山自然誌研究会(※)の合同フィールドワークでの植物観察で、火山荒原に自生しない植物が27種確認され、2001年の同会の記録から大幅に増加していることが確認されました。



2001年8月25日	2010年8月29日
シロザ・メヒシバ・カヤツリグサ・アキノノゲシ・ハキダメギク・タニタデ・ザクロソウ・ムシトリナデシコ・スギナ	ツユクサ・イヌタデ・カキドオシ・スギナ・ムシトリナデシコ・メヒシバ・コブナグサ・シソ・カナムグラ・スベリヒユ・コゴメガヤツリ・ハキダメギク・ハルジオン・コモチマンネングサ・ヤブマメ・トキンソウ・ヒメジョオン・ヒメスイバ・コハコベ・シバ・オランダミミナグサ・ヒメオドリコソウ・オヘビイチゴ・オヒシバ・エノキグサ・ドクダミ・タネツケバナ

《富士山自然誌研究会合同フィールドワークレポートより》

富士山南東斜面に侵入した植物

自然観察指導員 大嶋章 (富士山自然誌研究会植物部会)

富士山の南東斜面は宝永噴火(1707年)以降、厚い火山砂礫に覆われ、未だ緑の回復は進んでいない。このため、各団体が緑回復のため、ナナカマド、バッコヤナギ、ヤマハンノキ、ウリハダカエデ、ミズナラ、ブナ、イヌエンジュなどの樹木とフジアザミの植栽を進めている。これらの植物は平地で挿し木や実生から育てられ、当地に土とともに運ばれて植栽されたため、その都度平地の植物が火山荒原内に侵入し、その数を増やしている。2001年には9種だったが、今回は遊歩道からみられる範囲内で27種に増加していた。

噴火で失われた森を回復させたいと願う気持ちはわからないではないが、森の誕生には自然の法則があり歴史があって、植栽の弊害が起きる心配が出てきているのが現状である。

※ 富士山自然誌研究会は富士山の自然を科学的に調査・研究する機関として1996年に創設され、専門委員と一般会員からなります。専門部会では、植生、植物、昆虫、は虫類、両生類、鳥類、地質などの各分野の研究を行い、富士山の自然を総合的に解明することを目的としています。

合同フィールドワークは、会員と一般市民が参加して自然観察を行ないながら、各分野の学識者がそれぞれの立場で調査、研究した成果を現地でレクチャーするものです。

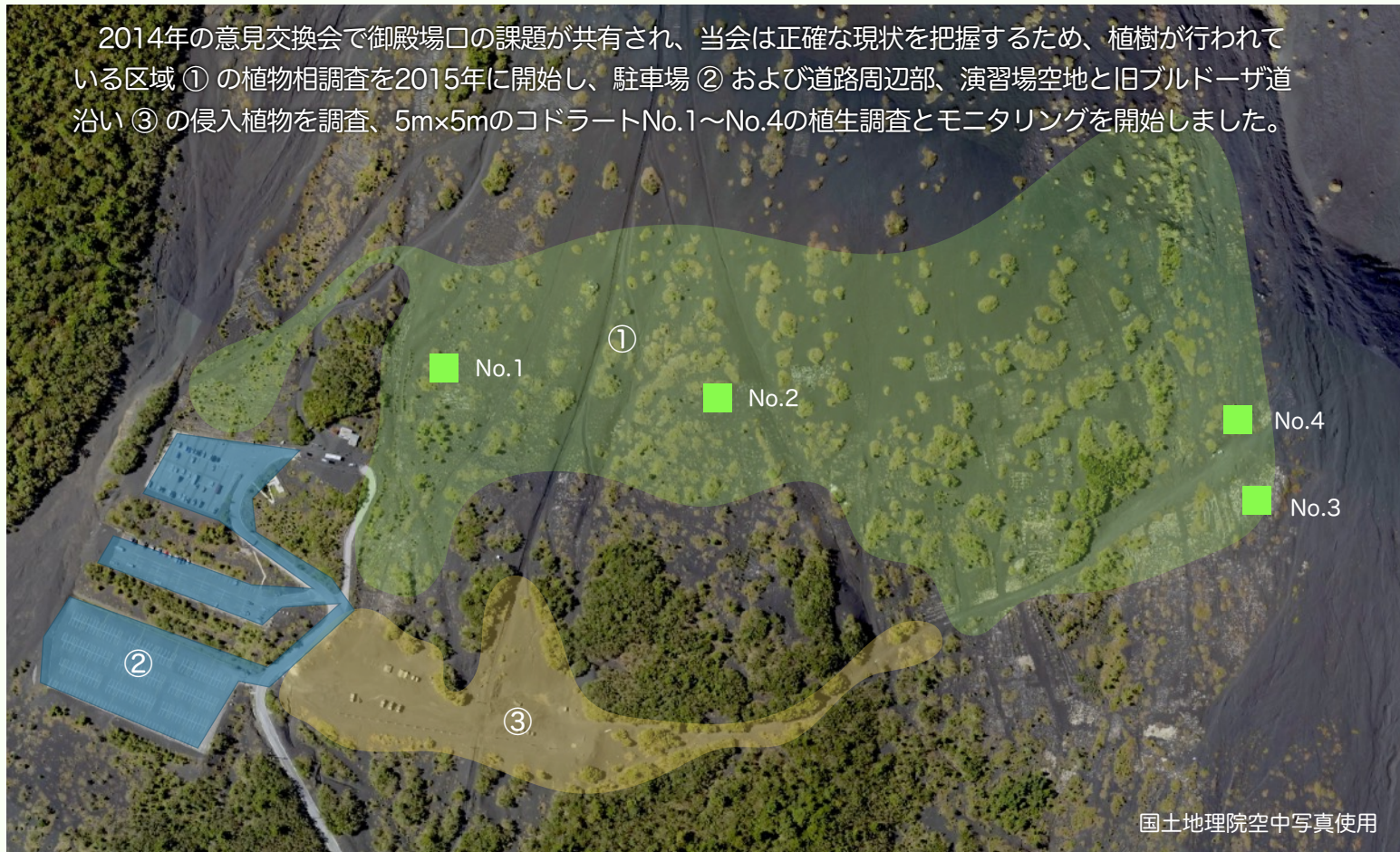
第3回合同フィールドワーク2010年8月29日参加者38名

フィールド・富士山二ツ塚周辺

各分野の講師 【気象】長田昭典 【地質】高橋豊 【植生】菅原久夫 【シダ類】細倉哲穂
【ほ乳類】今泉忠明・濱田俊 【鳥類】菅常雄・滝道雄 【蝶類】高橋真弓

植物相調査とコドラートによる植生調査

2014年の意見交換会で御殿場口の課題が共有され、当会は正確な現状を把握するため、植樹が行われている区域①の植物相調査を2015年に開始し、駐車場②および道路周辺部、演習場空地と旧ブルドーザ道沿い③の侵入植物を調査、5m×5mのコドラートNo.1～No.4の植生調査とモニタリングを開始しました。



国土地理院空中写真使用



① コドラートNo.1付近より



② 駐車場



③ 演習場空地



③ 旧ブルドーザ道

御殿場口火山荒原①の植物相調査記録 (2019年まで)

△：外来種 □：非自生種 ☆：植栽種

番号	科名	和名
1 シダ植物		
1	トクサ	□ スギナ
2	メシダ	□ イヌワラビ
2 裸子植物		
3	マツ	☆ ウラジロモミ
4	マツ	カラマツ
5	マツ	☆ イラモミ
6	マツ	☆ アカマツ
7	ヒノキ	☆ スギ
8	イチイ	☆ イチイ
3 被子植物		
9	ドクダミ	□ ドクダミ
10	モクレン	☆ コブシ
11	サトイモ	□ カラスビシャク
12	キンコウカ	ネバリノギラン
13	ラン	クモキリソウ
14	ラン	ネジバナ
15	アヤメ	△ ニワゼキショウ
16	ヒガンバナ	□ ノビル?
17	キジカクシ	□ ツルボ
18	キジカクシ	ギボウシsp.
19	キジカクシ	△ ムスカリ
20	ツユクサ	□ ツユクサ
21	イグサ	□ クサイ
22	イグサ	□ スズメノヤリ
23	イグサ	ヤマスズメノヒエ
24	カヤツリグサ	コタヌキラン
25	カヤツリグサ	クサスゲ
26	カヤツリグサ	アブラシバ
27	カヤツリグサ	? Carex sp.
28	カヤツリグサ	□ チャガヤツリ
29	カヤツリグサ	□ コゴメガヤツリ
30	カヤツリグサ	□ カヤツリグサ
31	イネ	△ コヌカグサ
32	イネ	□ スズメノテッポウ
33	イネ	□ コブナグサ
34	イネ	トダシバ
35	イネ	ヒメノガリヤス
36	イネ	タカネノガリヤス
37	イネ	□ メヒシバ
38	イネ	□ オヒシバ
39	イネ	□ アオカモジグサ
40	イネ	□ タチカモジ
41	イネ	? ウシノケグサsp.
42	イネ	□ チガヤ
43	イネ	カリヤスモドキ
44	イネ	□ ススキ
45	イネ	タチネズミガヤ
46	イネ	□ スズメノカタビラ
47	イネ	△ ヒロハノウシノケグサ
48	イネ	□ エノコログサ
49	イネ	△ ナギナタガヤ
50	イネ	シバ
51	ケシ	□ タケニグサ
52	ケシ	△ ナガミヒナゲシ
53	ツヅラフジ	アオツヅラフジ
54	メギ	メギ
55	キンポウゲ	△ オダマキ栽培種

番号	科名	和名
56	キンポウゲ	クサボタン
57	キンポウゲ	□ キツネノボタン
58	ベンケイソウ	□ コモチマンネングサ
59	アカバナ	△ メマツヨイグサ
60	アカバナ	△ ユウゲショウ
61	マメ	ムラサキモメンヅル
62	マメ	△ ゲンゲ
63	マメ	イワオウギ
64	マメ	イヌエンジュ
65	マメ	□ クズ
66	マメ	△ シロツメクサ
67	マメ	□ ヤハズエンドウ(カラスノエンドウ)
68	バラ	☆ アズキナシ
69	バラ	マメザクラ
70	バラ	シロバナノヘビイチゴ
71	バラ	ズミ
72	バラ	□ オヘビイチゴ
73	バラ	☆ カマツカ
74	バラ	フジイバラ
75	バラ	バライチゴ
76	バラ	ナワシロイチゴ
77	バラ	ナナカマド
78	バラ	シモツケ
79	グミ	ハコネグミ
80	グミ	グミsp.
81	グミ	マメグミ
82	アサ	□ カナムグラ
83	ブナ	☆ ブナ
84	ブナ	☆ ミズナラ
85	カバノキ	ヤシャブシ
86	カバノキ	ヤマハンノキ
87	カバノキ	ダケカンバ
88	カバノキ	☆ クマシデ
89	カバノキ	☆ イヌシデ
90	ニシキギ	ツルウメモドキ
91	ニシキギ	☆ マユミ
92	カタバミ	△ オッタチカタバミ
93	トウダイグサ	□ エノキグサ
94	トウダイグサ	△ コニシキソウ
95	トウダイグサ	△ オオニシキソウ
96	オトギリソウ	フジオトギリ
97	オトギリソウ	コケオトギリ
98	スミレ	□ タチツボスミレ
99	ヤナギ	バッコヤナギ
100	ヤナギ	☆? ネコヤナギ?
101	ヤナギ	イヌコリヤナギ
102	ヤナギ	ミヤマヤナギ
103	アブラナ	フジハタザオ
104	アブラナ	□ ナズナ
105	アブラナ	□ タネツケバナ
106	アブラナ	△ マメグンバイナズナ
107	アブラナ	□ イヌガラシ
108	ムクロジ	☆ イロハカエデ
109	ムクロジ	☆ ウリハダカエデ
110	ムクロジ	☆ オオイタヤメイゲツ
111	ムクロジ	☆ イタヤカエデ
112	タデ	オンタデ
113	タデ	イタドリ

番号	科名		和名
114	タデ	□	オオイヌタデ
115	タデ	□	イヌタデ
116	タデ	□	タニソバ
117	タデ	△	ヒメスイバ
118	ナデシコ	□	ミミナグサ
119	ナデシコ	△	オランダミミナグサ
120	ナデシコ		カワラナデシコ
121	ナデシコ	□	ツメクサ
122	ナデシコ	△	ムシトリナデシコ
123	ナデシコ		フシグロ
124	ナデシコ	□	コハコベ
125	ナデシコ	△	ミドリハコベ
126	ナデシコ	□	ノミノフスマ
127	ヒユ	□	シロザ
128	ザクロソウ	□	ザクロソウ
129	スベリヒユ	□	スベリヒユ
130	ミズキ	☆	ミズキ
131	ミズキ	☆	ヤマボウシ
132	アジサイ	☆	ウツギ
133	サクラソウ	□	コナスビ
134	ツツジ		ハナヒリノキ
135	ツツジ		ベニバナイチヤクソウ
136	ツツジ	☆	レンゲツツジ
137	アカネ	□	ヨツバムグラ
138	アカネ		ケナシヨツバムグラ
139	アカネ		アカネ
140	リンドウ		ハナイカリ
141	ムラサキ	□	キュリグサ
142	ナス	□	イヌホオズキsp.
143	モクセイ	☆	アオダモ
144	モクセイ	☆	イボタノキ
145	モクセイ	☆	ミヤマイボタ
146	オオバコ	□	オオバコ
147	オオバコ	△	タチイヌノフグリ
148	オオバコ	△	オオイヌノフグリ
149	ゴマノハグサ	△	ピロードモウズイカ
150	シソ	□	キランソウ
151	シソ		ヤマトウバナ
152	シソ	□	カキドオシ
153	シソ	△	ヒメオドリコソウ
154	シソ	□	シソ
155	サギゴケ	□	ムラサキサギゴケ
156	サギゴケ	□	トキワハゼ
157	ハマウツボ		タチコゴメグサ
158	キツネノマゴ	□	キツネノマゴ
159	キキョウ		ヤマホタルブクロ
160	キク	△	ブタクサ
161	キク		ヤマハハコ
162	キク		ヨモギ
163	キク		シロヨメナ
164	キク		ノコンギク
165	キク	□	トキンソウ
166	キク	☆	リュウノウギク
167	キク		フジアザミ
168	キク	△	ヒメジョオン
169	キク	△	ハルジオン
170	キク	△	オオアレチノギク
171	キク	△	ハキダメギク
172	キク		ヤナギタンポポ
173	キク	□	ニガナ
174	キク	□	イワニガナ (ジシバリ)

番号	科名		和名
175	キク	□	アキノノゲシ
176	キク		コウゾリナ
177	キク	□	ハハコグサ
178	キク		キオン
179	キク	△	セイタカアワダチソウ
180	キク		アキノキリンソウ
181	キク	□	オニノゲシ
182	キク	△	セイヨウタンポポ
183	キク	?	タンポポsp.
184	スイカズラ		オトコエシ
185	スイカズラ		マツムシソウ
186	スイカズラ	☆	ニシキウツギ
187	ウコギ	□	チドメグサ
188	セリ		イワニンジン
189	セリ	□	オヤブジラミ

【判断が難しい植物について】

御殿場口では長期にわたり植栽活動が行なわれてきたため、古い時代に麓から植物の種子が侵入して定着していることも考えられます。この調査では、判断が難しい植物は下記のように決定しました。

※ ススキ、シバ、タチツボスミレについては裸地部分には自生しないので侵入種としました。

※ イワニガナ (ジシバリ) については過去にカラマツが植栽された双子山森林限界、林縁部などに分布していますが、裸地部分には自生しないので侵入種としました。



イワニガナ(ジシバリ)

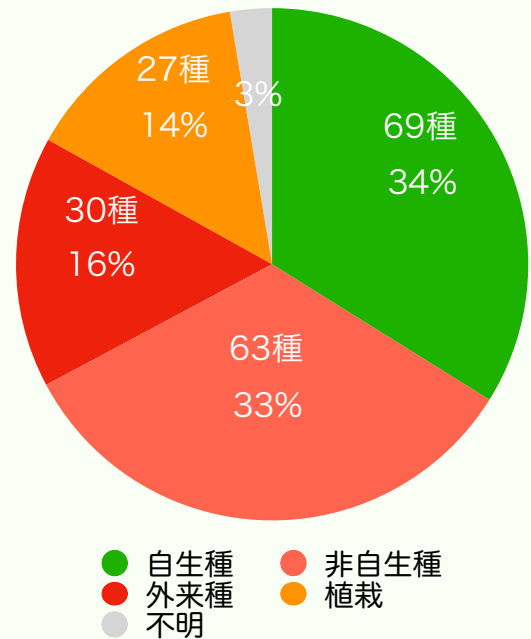
御殿場口火山荒原①で記録された植物の帰化率・侵入種率

調査区域①で記録された植物は189種でその中で非自生種は120種になりました。内訳は、植栽された非自生種が27種(14%)、植樹とともに麓から持ち込まれたと思われる植物は93種(49%)で、その中に30種(16%)の外来種が確認されました。火山荒原の自生種は69種(34%)でした。

この区域に隣接する「御殿場口～幕岩～須山御胎内」の植物相調査(下表参照)と、火山荒原の植樹が行なわれていない区域の植生調査(5×5mのコドラート3箇所)では外来種、非自生種は確認されませんでした。

御殿場口の帰化率(外来種の割合)16%は都市部の公園などと同じレベルです。

【御殿場口の植生】



【各地の帰化率】 成育環境の違いによる帰化率

場所	環境	区分	種類数	帰化率
御殿場口～幕岩～須山御胎内 (2014.7.1)	常緑針葉樹林～落葉広葉樹林 遊歩道	外来種	0	0%
		確認種	160	
富士山西白塚 (1983年～1986年)	落葉広葉樹林、ウラジロモミ林 駐車場、園地、遊歩道	外来種	13	4%
		確認種	338	
小山町中島・金時公園 (1986年～1988年)	落葉広葉樹林、ヒノキ林、駐車場 運動場、園地、遊歩道	外来種	24	6%
		確認種	429	
御殿場口火山荒原	雪代堆積地、スコリア火山荒原 裸地、パッチ、植栽地	外来種	30	16%
		確認種	189	
沼津市千本松原 (1994年～1995年)	クロマツ林、園地、遊歩道、海岸裸地	外来種	89	19%
		確認種	464	

侵入植物は、イネ科、キク科がそれぞれ14種類と際立って多く、続いてナデシコ科、マメ科などが多くみられました。日本で外来植物の種類が多い科はキク科、イネ科、マメ科、アブラナ科、ヒルガオ科、アカザ科、タデ科、ナデシコ科などですが、本調査の結果もこれを裏付けています。また、外来植物以外の侵入植物のうち田畑や人家周辺を主な生育場所とする史前帰化植物(※)が非常に多くみられました。

※ 有史以前の縄文、弥生時代に畑作や稲作など栽培植物に随伴して渡来したとされる植物で、通常在来植物として扱われる

非自生種の科別種類数と外来植物数 (2019年までの調査結果より)

科名	種類	外来植物	科名	種類	外来植物	科名	種類	外来植物
イネ	14	3	カヤツリグサ	4		ケシ	2	1
キク	14	7	アブラナ	4	1	キンポウゲ	2	1
ナデシコ	7	3	オオバコ	3	2	アカバナ	2	2
マメ	4	2	キジカクシ	3	1	サギゴケ	2	
タデ	4	1	トウダイグサ	3	2	トクサ科など23科	23	3
シソ	4	1	イグサ	2				
計							97	30

元静岡県自然環境調査委員会植物部会会員佐藤孝敏氏による

駐車場と周辺部②と演習場空地と旧ブルドーザ道③の侵入植物

②駐車場および道路周辺部、③演習場空地と旧ブルドーザ道沿いで記録された侵入植物の合計は外来植物5種を含む25種でした。①の区域では、②、③の区域に比べ人の活動がきわめて少ないにもかかわらず、4倍以上もの侵入植物が記録されており、植樹の影響の大きさを裏付けています。

② 駐車場

調査	科名	和名
2016	イネ	- ウシノケグサsp.
	マメ	△ ムラサキツメクサ
	イラクサ	□ アカソ
	ナデシコ	△ オランダミミナグサ
	キク	□ イワニガナ(ジシバリ)
2017	イグサ	□ クサイ
	イネ	□ アキメヒシバ
	イネ	□ スズメノカタビラ
	イネ	□ ヌカボ?
	イネ	□ シバ ※
	アブラナ	□ イヌガラシ
	ナデシコ	□ ノミノツツリ
	シソ	□ ナギナタコウジュ
	キク	△ セイヨウタンポポ

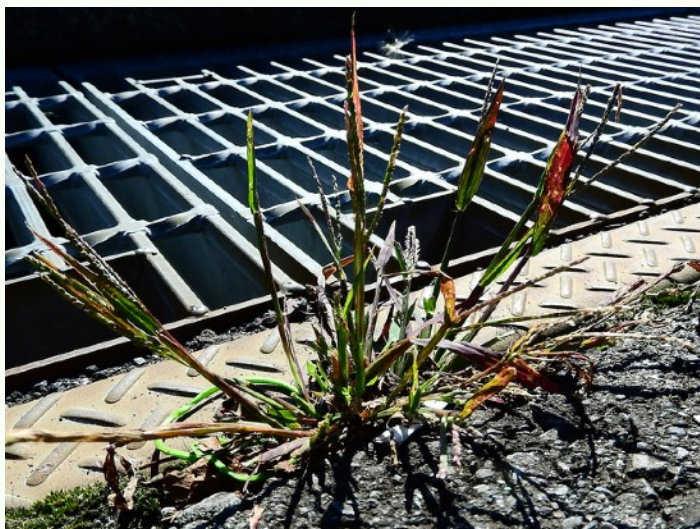
③ 演習場空地と旧ブルドーザ道沿い

調査	科名	和名
2017	トクサ	□ スギナ
	イグサ	□ スズメノヤリ?
	カヤツリグサ	□ アオガヤツリ
	イネ	□ ススキ
	イネ	□ チヂミザサ
	イネ	□ カゼクサ
	タデ	△ ヒメスイバ
	タデ	□ イヌタデ
	アカネ	□ カワラマツバ
	キク	△ ヒメジョオン
	キク	□ イワニガナ(ジシバリ)
	キク	□ タカサブロウ

△：外来種 □：非自生種



ウシノケグサの仲間



アキメヒシバ



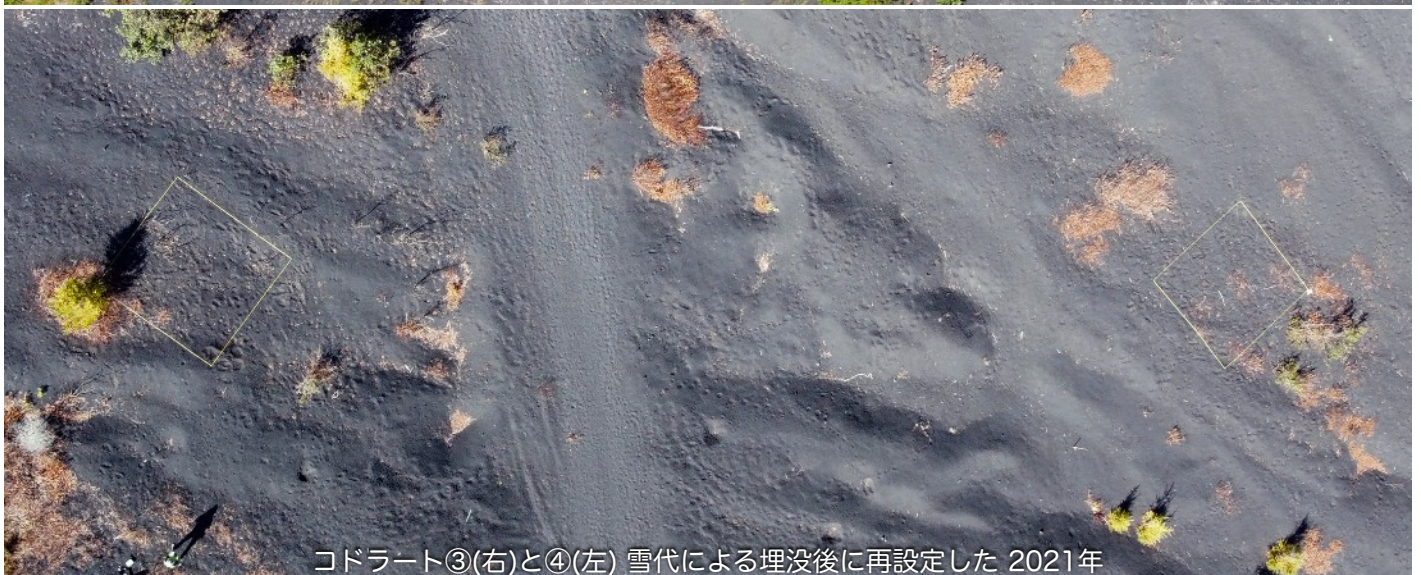
アオガヤツリ



タカサブロウ

御殿場口火山荒原①のコドラートによる植生調査

植樹活動が行われているエリアに2016年に4箇所のコドラートを設置して植生の推移をモニタリングしています。この間にコドラート内に植樹が行われ、その後、2団体が植樹活動を終了しました。また、雪代が発生して2箇所のコドラートが埋没するなど、このエリアのありのままの現状を記録したモニタリングになりました。



【コドラート No.1】 5m×5m 位置 N: 35°20'11.—" E: 138°47'38.—" 標高1,459m

2016年に記録された植栽樹のミヤマヤナギ(バッコヤナギとして植栽)は鹿に食べられて2019年には消滅しました。新たにイヌコリヤナギが植栽されましたが、葉は鹿に殆ど食べられていました。2025年には植栽樹は消滅し、この区域で植樹活動をしていた団体が活動から撤退したため、新たな植栽樹は見られませんでした。シモツケの食害が見られないのは周辺の植栽樹が消滅したためニホンジカが近づかなくなったからではないかと考えられます。



△: 外来種 □: 非自生種 ☆: 植栽種 ▲: 植栽種 ※: 食害

分類	種名	調査日 被度 備考								
		2016/8/1			2019/8/29			2025/6/26		
木本	ミヤマヤナギ	+	▲	※						
	シモツケ	+		※	+		※	+		
	グミsp.	r		※						
	ミヤマイボタ	r	▲	※				+		
	イヌコリヤナギ				+	▲	※			
	ニシキウツギ				r	▲				
	イヌエンジュ								+	
草本	ヤマホタルブクロ	1			+			+		
	カリヤスモドキ	+			2			3		
	キオン	+								
	クサボタン	+								
	コタヌキラン	+			+		※	r		
	タチツボスミレ	+			+			+		
	ノコンギク	+			+					
	タカネノガリヤス	+								
	ヨモギ	+			+			+		
	クサボタン				r			+		
	モジズリ				r					
	フジアザミ				r					
	ケトダシバ							+		
	ニイタカスゲ							r		
	ミミナグサ									
	スゲ属 sp.							r		
	フジハタザオ							+		
クモキリソウ							r			
	種数	13	2		12	2		14	0	

【コドラート No.2】 5m×5m 位置 N:35°20'17.―" E:138°47'40.―" 標高1,462m

2019年にはコドラート周辺の裸地部分に、非自生種のイヌコリヤナギなどが大量に植栽され、植栽樹の根元には有機物が散布されていました。2025年には主な植栽種のイヌコリヤナギは鹿に食べられて消滅しました。侵入植物の増加が心配されましたが、植樹が行われなくなったことで周辺域でも侵入種が減少しています。侵入種は芽吹いても環境に順応できずに多くが消滅すると思われます。



△：外来種 □：非自生種 ☆：植栽種 ▲：植栽種 ※：食害

分類	種名	調査日 被度 備考								
		2016/8/1			2019/8/29			2025/6/26		
木本	ウリハダカエデ	r	▲		+			+		
	シモツケ	+		※	r		※			
	イヌコリヤナギ				+	▲	※			
	イヌエンジュ				+	▲	※	r	▲	
	イボタノキ				+	▲				
	ニシキウツギ				+	▲				
	ミズナラ				+	▲		+	▲	
	ウツギ							+		
	ミヤマイボタ							r		
草本	イタドリ	2			1			1		
	カリヤスモドキ	2			2			2		
	ヤマホタルブクロ	1			1			+		
	キオン	+			+			+		
	クサボタン	+			r					
	ヨモギ	+			+					
	ノコンギク	r						r		
	タチツボスミレ				+					
	フジアザミ				r			r		
	ヤマトウバナ				r			+		
	ミミナグサ							+		
	スゲ属 sp. (コイトス)							+		
	種数	9	1		16	5		14	2	

【コドラート No.3】 5m×5m 位置 N: 35°20'29.—" E: 138°47'41.—" 標高1,442m

2018年3月5日に発生した雪代によりコドラートは埋没し植生は消滅しました。2019年はコドラートのあたりにちぎれた根から発芽したイタドリと実生と思われるフジアザミが見られました。2025年にGPSでコドラートの位置を再設定しました。



△：外来種 □：非自生種 ☆：植栽種 ▲：植栽種 ※：食害

分類	種名	調査日 被度 備考							
		2016/8/1		2019/8/29		2025/6/26			
木本	ヤマハノキ	1							
	ウツギ	r	▲						
	ウリハダカエデ	r	▲						
	カマツカ	r	▲						
	ナナカマド	r							
	イヌエンジュ						+		
草本	ヨモギ	2							
	イタドリ	1		r			2		
	カリヤスモドキ	1					+		
	キオン	+							
	ススキ	+							
	トダシバ	+							
	フジアザミ	+		r			+		
	ギボウシsp.	r							
ヤマハハコ	r								
	種数	14	3	2	0	4	0		

【コドラート No.4】 5m×5m 位置 N: 35°20'28.—" E: 138°47'39.—" 標高1,450m

2018年3月5日に発生した雪代によりコドラートは埋没、周辺の植栽樹の根元も埋まりました。堆積したスコリアが浅かったため、イタドリは元の株から発芽し、フジアザミが新たに確認されました。2025年にGPSでコドラートの位置を再設定しました。



△：外来種 □：非自生種 ☆：植栽種 ▲：植栽種 ※：食害

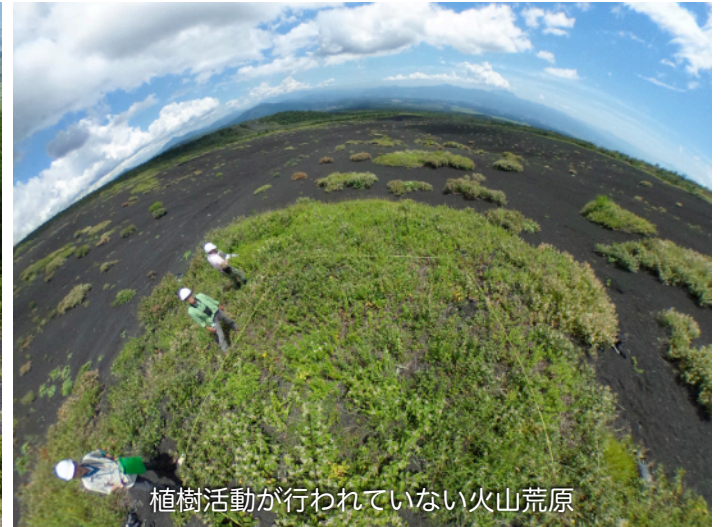
分類	種名	調査日 被度 備考							
		2016/8/1		2019/8/29		2025/6/26			
木本	イヌエンジュ	1	▲				1		
	ヤマボウシ	1	▲						
	ウリハダカエデ	+	▲						
	カマツカ	+	▲						
	シモツケ	+							
	ミズナラ	+	▲						
	ミヤマイボタ	+	▲						
	アオダモ	r	▲						
	ナナカマド	r	▲						
	マメグミ	r	▲						
草本	カリヤスモドキ	2					+		
	イタドリ	+		r			1		
	キオン	+							
	ノコンギク	+							
	フジハタザオ	+							
	ヤマホタルブクロ	+							
	ヨモギ	+							
	ススキ	r							
	フジアザミ			r					
	ケトダシバ							+	
	種数	18	9	2	0		4	0	

森林限界および非植栽区域の植生調査

植樹が行われている区域と比較するため、周辺の火山荒原の双子山森林限界と御殿場口北側の3箇所でコドラートによる植生調査を行いました。



双子山森林限界



植樹活動が行われていない火山荒原

【コドラート⑤】 5m×5m

双子山森林限界 標高1,682m
N : 35°19'52.---" E : 138°46'54.---"

【コドラート⑥】 5m×5m

双子山森林限界 標高1,674m
N : 35°19'53.---" E : 138°46'57.---"

【コドラート⑦】 5m×5m

雪代堆積地非植栽地 標高1,475m
N : 35°20'33.---" E : 138°47'32.---"



2017年9月3日

分類	種名	被度
木本	カラマツ	1
	フジイバラ	1
	ツルウメモドキ	r
草本	イタドリ	3
	タカネノガリヤス	3
	ヤマホタルブクロ	2
	ミミナグサ	1
	シロバナノヘビイチゴ	+
	ヤマトウバナ	+
	ヨモギ	+
	アキノキリンソウ	r
	イワオウギ	r
	キオン	r
	コウゾリナ	r
	フジアザミ	r
	フジハタザオ	r

2017年9月3日

分類	種名	被度
木本	カラマツ	3
	フジイバラ	1
	マメグミ	+
	ツルウメモドキ	r
	タカネノガリヤス	3
草本	イタドリ	2
	コウゾリナ	+
	タチツボスミレ	+
	バライチゴ	+
	ヤマスズメノヒエ	+
	ヤマホタルブクロ	+
	ヨモギ	+
	イワオウギ	r
	キオン	r
	ケナシヨツバムグラ	r
	ハナイカリ	r
	フジアザミ	r
	ミミナグサ	r

2017年8月9日

分類	種名	被度
草本	イタドリ	3
	カリヤスモドキ	1
	ノコンギク	1
	ヨモギ	1
	オンタデ	+
	キオン	+
	クサボタン	+
	アキノキリンソウ	r
	イワオウギ	r
	コウゾリナ	r
	フジアザミ	r
	フジハタザオ	r
	ヤマホタルブクロ	+

コドラート調査と植樹活動

植樹を行ってきた2団体が活動から撤退し、コドラート①②では2019年までに植栽された8種が2025年には2種に減少し、コドラート③④では植栽された10種全てが雪代で消滅しました。

主な植栽樹のミヤマヤナギ、イヌコリヤナギを鹿が好んで食べ、芽吹いた侵入種の多くが厳しい環境に耐えられずに消えていったものと思われます。2010年に富士山自然誌研究会の調査で27種を記録した登山道沿いの観察では侵入種は見られなくなりました。しかし、外来種のアキノスズメのように環境に適応して繁殖し、駆除することが難しくなってしまった植物もあります。



コドラート内に植樹 (2019年)

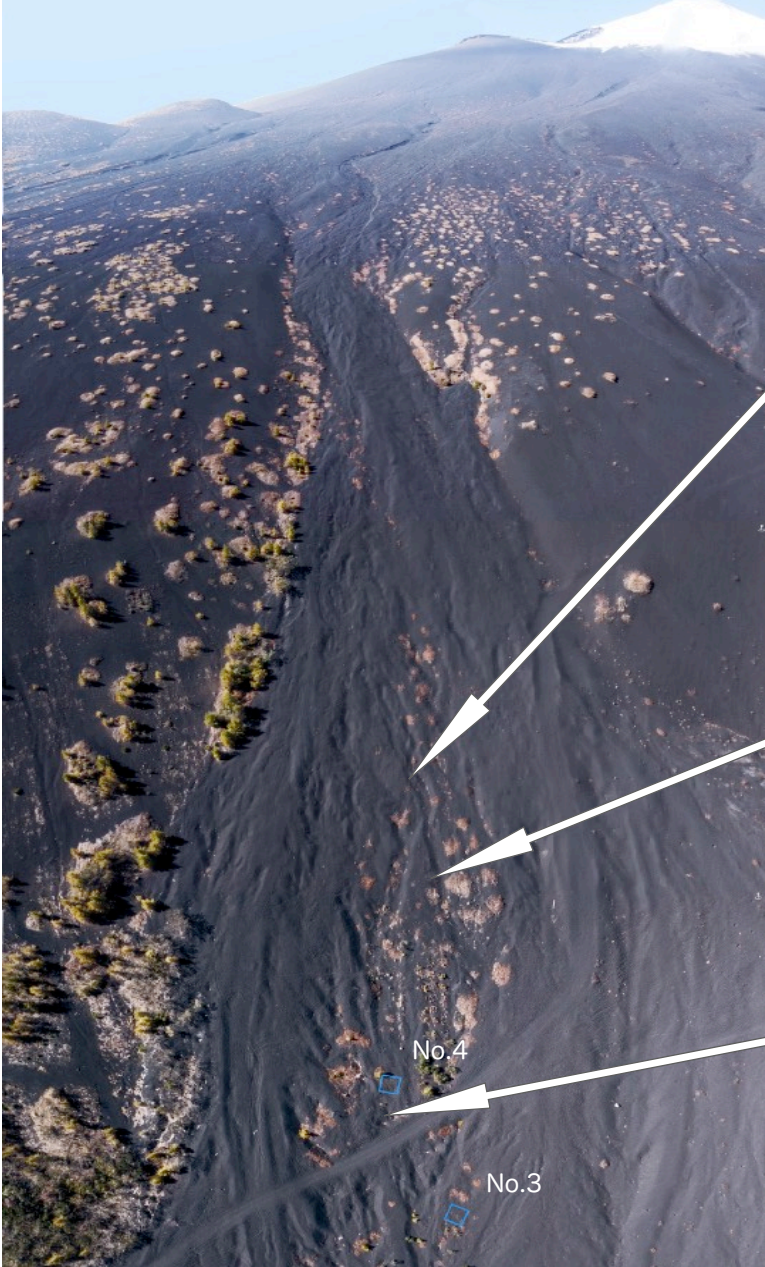


鹿に食べられたイヌコリヤナギ(2019年)



散布する有機物 (2019年)

2018年3月に発生した雪代跡・埋没したコドラートと植物



植樹されたイヌコリヤナギ (2014年)



外来種アキノスズメが広く繁殖 (2016年)



外来種ヒメスズメが開花結実 (2014年)

注意を要する侵入植物

侵入植物の中で繁殖を始めているのが外来種のヒメスイバ、麓の雑草のスギナ、タケニグサなどです。外来種のビロードモウズイカは数は少ないものの開花結実が確認されており、種子の寿命も長いいため注意が必要です。



ハンドブック「富士山御殿場口 雪代堆積地の侵入植物」

植樹活動行っている団体より「どれが畑の雑草かわかるようにしてほしい」との要望があり、2015年の調査記録に2014年11月の調査記録と、2001年、2010年の富士山自然誌研究会の調査記録を加えた91種の侵入植物を掲載したハンドブックを作成しました。



ハンドブックに収録した侵入植物一覧

外来種		史前帰化植物		日本在来種	
オオイヌノフグリ	ヒロハウシノケグサ	アキノノゲシ	ツルボ	アオカモジグサ	スギ
オオニシキソウ	ブタクサ	イヌタデ sp	トキンソウ	イヌガラシ	スギナ
オッタチカタバミ	ムシトリナデシコ	エノキグサ	ナズナ	イヌホオズキsp.	ススキ
オキノゲシ	ムスカリ	エノコログサ	ヌカボ	イヌワラビ	スズメノヤリ
オランダミミナグサ	メマツヨイグサ	オオイヌタデ	ハハコグサ	オダマキ栽培種	タケノグサ
ゲンゲ	ユウゲショウ	オオバコ	ミミナグサ	オヘビイチゴ	タチカモジグサ
コハコベ		オヒシバ	ムラサキサギゴケ	オヤブジラミ	タチツボスミレ
シロツメクサ		カナムグラ	メヒシバ	カキドオシ	タニソバ
セイタカアワダチソウ		カヤツリグサ		カラスノエンドウ	タニタデ
セイヨウタンポポ		クサイ		カラスビシャク	チャガヤツリ
タチイヌノフグリ		コゴメガヤツリ		キツネノボタン	ツククサ
ナガミヒナゲシ		コモチマンネングサ		キツネノマゴ	トキワハゼ
ナギナタガヤ		ジシバリ		キランソウ	ドクダミ
ニワゼキショウ		スズメノカタビラ		クズ	ニガナ
ハキダメギク		スズメノテッポウ		コナスビ	ノビル?
ハルジオン		スベリヒユ		コブナグサ	ノミノフスマ
ヒメオドリコソウ		タネツケバナ		ザクロソウ	ミドリハコベ
ヒメジョオン		チガヤ		シソ	ヤブマメ
ヒメスイバ		チドメグサ		シバ	ヨツバムグラ
ピロードモウズイカ		ツメクサ		シロザ	

2016年、2017年に新たに確認した侵入種



キュウリグサ (史前帰化植物)

コニシキソウ (外来種)

マメグンバイナズナ (外来種)

オオアレチノギク (外来種)

侵入植物の駆除活動



2016年、静岡県主催「外来種撲滅大作戦」を支援し、外来種のヒメスイバを中心に約20kgの侵入植物の駆除を行いました。また、御殿場小山ボーイスカウトのみなさんと協働で、侵入植物の駆除活動を行いました。



善意の植樹 生態系に影響？

富士山御殿場口

新5合目「火山高原」

増える侵入植物

富士山御殿場口新5合目周辺の砂れき地帯「火山高原」で、在来種ではない「侵入植物」が増えていることが地元NPO法人の調査で分かった。一帯の植生の3分の2に上るといふ。善意の植樹活動が原因との見方があり、関係者は公的機関による早急な現状把握と対策を求めている。



侵入植物を除去するNPO法人富士山の森を守るホシガラスの会メンバー＝8月、富士山御殿場口新5合目付近（同会提供）

調査したのは富士山の自然環境保護に取り組むNPO法人富士山の森を守るホシガラスの会（御殿場市）。2014年から新5合目周辺の砂れき地帯約16段で、生息する植物を全種類調べる植物相（しよくぶつそう）調査を実施。約190種のうち48％は国内由来の非在来種、16％は外来種と判明した。

火山高原にはフジアザミやフジハタザオなど砂れき地固有の植物が生息する。同会は「侵入植物がはびこれば、本来ある植物がなくなってしまう」と懸念する。

同会が原因の一つとみているのが植樹だ。火山高原は1707年の宝永噴火で森林が失われ砂れき地帯になったとされ、複数の団体が森林の回復を掲げて植樹活動が続いている。自生種ではないイヌコリヤナギが植えら

れたたり、持ち込まれた土や肥料に混ざった自生種以外の種子が成長したりするといふ。

2014年に行政や植樹を行う団体との意見交換の場が持たれ、何らかの対策が必要と確認された。だが、その後は具体的な動きがないままだ。本県には富士山の自然環境に特化した研究機関がない。専門家の見解を聞く機会が乏しく、各団体はよしあしを判断できずにいるといふ。

火山高原の生態系も富士山の多様性の一部だとして手を加えることに否定的な立場を取る同会は、ホームページで情報発信し注意喚起を図る。16年には侵入植物の除去と、特定区域で植生の種類や数の変化を把握する調査に乗り出した。

メンバーは「これ以上自然環境を壊さないためにも専門家を交え考えを統一する機関をつくり、せめて植樹の指針を定める必要がある」と指摘する。

（御殿場支局・矢嶋宏行）

地元NPO調査 公的機関の検証 急務

静岡新聞2019年11月14日夕刊記事（静岡新聞社許諾済）



外来種ヒメスイバの駆除 2019年8月



繁殖するヒメスイバ 2022年8月

あとがき

私たちが2015年から始めた御殿場口の自然環境保全活動は今年度で10年になりました。本書は2020年発行の改訂版に、新たに判明した過去の歴史を追加し、モニタリング調査の結果などから2025年の御殿場口の現状をまとめたものです。

御殿場口で植樹が始められようとしていた時、多くの学識者、環境団体などから反対意見が出されました。良かれと思って行った自然への介入が無関係に思える動植物に大きな影響を与えてしまうことがあります。

史誌に記された御殿場口の雪代の記録、先人たちのカラマツの造林事業などから、私たちは自然への向き合い方について、多くを学ぶことができました。

最後の大規模雪代から30年が経過し、今、御殿場口火山荒原では自らの力でカラマツが芽吹き成長しています。この景観も、雪代による消滅と再生が繰り返されている中での一コマなのかもしれません。

御殿場口の火山荒原は富士山の貴重な自然環境のひとつです。その自然環境をどのように守り、後世に伝えるべきかを考えるとき、本書がその一助になれば幸いです。

当会の活動にご協力いただきました皆様に深く感謝申し上げます。

御殿場市 東富士演習場関係法人協議会 印野郷土振興協会 須山振興会

玉穂財産区 西沢山野保護申合組合 小山町 陸上自衛隊富士学校

富士山自然誌研究会 (株)エアロ・フォト・センター

植物調査 元静岡県環境調査委員会植物部会会員 佐藤孝敏

環境調査 明治大学総合数理学部 現象数理学科 特任准教授 佐藤一

(敬称略)

NPO法人富士山ホシガラスの会事務局長 勝又幸宣

2026年3月

富士山 御殿場口の自然環境と課題

2026年版

令和7年度 御殿場市富士山環境保全・教育推進事業

発行者 : NPO法人 富士山ホシガラスの会

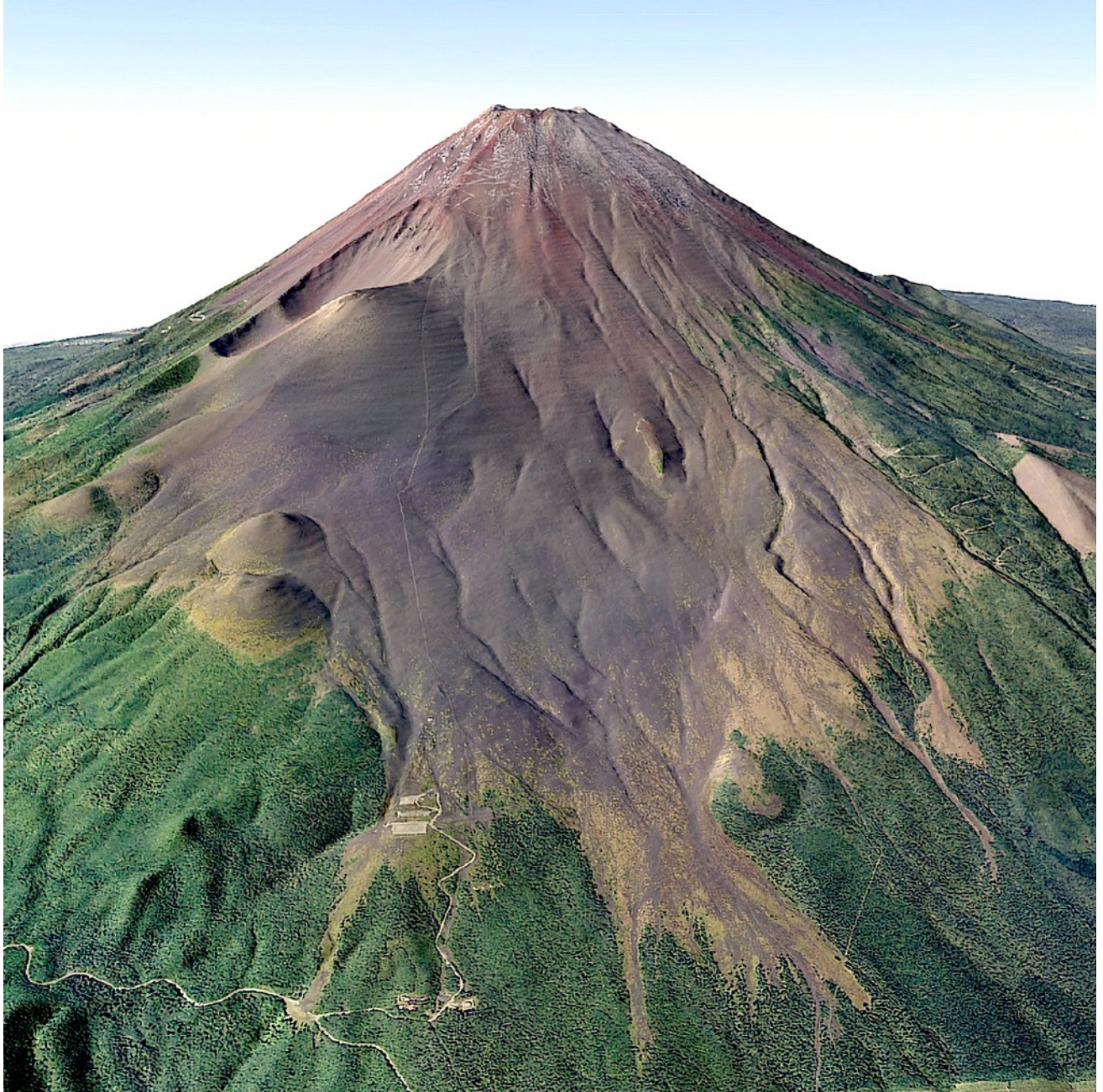
〒412-0006 静岡県御殿場市中畑1691-14 TEL0550-73-04345

ホームページ <http://hosigarasu.org> E-mail fujisan@hosigarasu.org

監修 : 佐藤孝敏

編集 : 勝又幸宣 (構成・写真)

写真 : 菅 常雄 (野鳥) 鬼頭宏和 (表紙)



御殿場口火山荒原(雪代堆積地)全景 (株) エアロフォトセンター航空写真